

2012年 8月20日・高知新聞 「学芸」欄では

脱原発への叫び 詩集に

東京電力福島第1原発の事故によって、生命が危機にさらされている。その心の叫びを詩に託した「脱原発・自然エネルギー218人詩集」（コールサック社）が出版された。悲劇的な現実と、目指すべき未来が、さまざまな視点からつづられている。

福島県南相馬市に住み、原発の危険性を長年訴えてきた若松丈太郎さんは、原発周辺から人々が避難した風景を「神隠し」になぞらえ、「ふりむいてもだれもいない／なにかが背筋をぞくっと襲う／広場にひとり立ちつくす」と書いた。

広島原発慰霊碑の言葉にちなみ、詩「繰り返された過ち」を作った上田由美子さんは、核のない社会への悲願をつづった。自然エネルギーを利用した発電への希望や、不便であっても豊かな自然に囲まれる幸福を表現した詩も集まった。本県関係者では小松弘愛さん「アインシュタインの声」、福本明美さん「芽吹き」、山本衛さん「大事なものは」を掲載している。

日本人だけでなく、米国や英国、インド、韓国など海外の詩人23人も参加。外国の読者にも届けるため、全ての詩の英訳も収録している。

出版に際して記者会見したコールサック社代表の鈴木比佐雄さんは「原発の本質的な恐ろしさを書いてきた詩人は多い。詩人の自由な立場、さまざまな感性で作ったものを読むことに意義がある」と話した。

と紹介されています。